木にこだわる建築家 ⑲

長谷川順持氏

長谷川建築デザインオフィス

長年の問いかけが実現

9チセン角だけで建てる家

コミュニティ構築の橋渡しへ

長谷川順持氏（長谷川建築デザインオフィス社長）は、9チセンの角材と1種類の接合金物だけを使用した「森の小径木の家」を考案・設計し、このほど上棟した。2011年には、「〝小径木だけで創る〟空間デザイン」でグッドデザイン賞を受賞。良い〝デザイン〟に贈られる同賞を〝アイデア〟で受けた。9チセン角だけを用いた建築物の構想は、設計者としての長年の問いかけへの答えでもある。

森の小径木の家は、国産材、特に小径木の活用を視野に入れたものだ。部材として用いる9チセンの角材は、間伐材や主伐材先端など径級14チセン前後の丸太から取得する。この9チセンの角材を、メープル材の丸ダボで接ぎ、組み立てたものが森の小径木の家だ。

部材接合には金物も用いるが、多くは木材の収縮を利用した。ダボを過乾燥気味にし、これが接合後に膨らむことで強固な接合が実現する。

現場作業は、押し切りを用いた切断、ドリルでの穴開けといった簡素なもののみ。職人は簡単に、施主など素人でも容易に森の小径木の家を建築することができる。

長谷川氏は「国産材の利用というと、眉間に皺が寄るような難しさ、困難さを伴うと感じていた。これをもっとカジュアルに、身の丈に合ったものにできないかと考えていた」と語る。

だが、森の小径木の家への挑戦の根底にあったのは、設計士としての長年の問いかけだ。「高温多湿な日本で、こうした独特な風土が育んだ木材資源がありながら、活用できない現状に長年直面してきた。設計者として何かできないかという思いがあった」（長谷川氏）。

長谷川氏

木造建築に魅了され、木材の可能性や弱点を見てきた」（同）という。

その後、31歳で独立するまでの修行時代は古民家に触れる機会が多く、木造建築や国産材利用への思いを深くしていく。さらに、28歳の頃に奈良県で住宅関連企業が主催するコンペで優勝した経験が外材の力を借りないと住宅を造れないなかにあって、国産材だけで家ができたという経験は大きかった」（同）と振り返る。

在来工法は、空間自由度が高いが、部材寸法や樹種、金物など使用部材の多さや選択肢の広さから、煩雑だという思いもあった。

たのは、大学時代に国宝や重要文化財の研究を重ね、「本物の木造建築」に触れたことにある。「ナマモノの木材を使い1000年以上をも経ることに感銘した。古建築は傷んだ部材を取り換えながら修繕し、歴史を重ねてきた。修繕の過程を学び木材の可能性や弱点を見てきた」（同）と

こうした思いを強くさせた。

同コンペでは、吉野材、特に並材だけを用いた住宅を提案。その際に、山の様子にも触れた。「山によって抱えている問題は様々だ。だが、山の事情と相談すれば、国産材だけで1棟の家が建つ。

簡略な施工といった特徴から、〝家〟だけでなく仮設住宅用途や地域コミュニティ構築の橋渡し役としての期待が高まっている。

仮設住宅用途では、NPO法人つよく美しいふるさとづくり機構が、使用部材が軽く、簡単な工具を用いて素人でも構造躯体の組み上げが可能である特徴に着目。「ピースハウス」として、応用を目指している。

森の小径木の家は、16坪で800万円前後を想定している。長谷川氏は今、同家の次のビジョンを見据えている。同家の建設を通したコミュニティづくりだ。「例えば、コンビニエンスストア。これが郊外で地域コミュニティの核となっている。地域住民が建設の段階からかかわることができれば、小径木の家がコミュニティ構築のツールとなる」。（同）。

現在、幼保施設などを含め、同家を核としたコミュニティ構築の仕組みを模索中だ。「国産材を使うことが、自然に織り込まれる。森の小径木の家を通じて、そうした仕組みができれば」（同）と、挑戦は続く。

9チセン角だけでの建築を実現

リアルパネルに新商品

立体感ある古材調再現

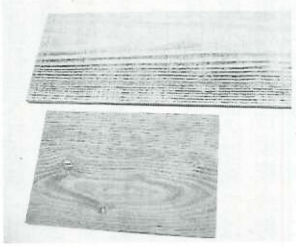
ニッシンイクス

建材輸入・販売のニッシンイクス（山口県下松市、加藤洋社長）は、無機系ボードに天然木ツキ板を張った内装用不燃ボード「リアルパネル」シリーズに、古材調のツキ板を張った新商品を追加した。

同シリーズは不燃性の無機ボードに0・2ミリ厚のツキ板を張った内装用壁材。不燃材料の国土交通大臣認定を取得しており、内装制限のある都市部の店舗にも使用できる。

厚さ6ミリと壁材としては使いやすい薄さと不燃性、樹種や加工のバリエーションの豊富さが店舗デザインの現場で支持され、主に首都圏で売り上げを伸ばしている。

バリエーションとしては、ゼブラウッド、ウェンジ、ウォールナットなどの銘木ツキ板を張ったウッドバリエーションシリーズのほか、ナラツキ板表面を古材調に仕上げたオークラスティックシリーズ、様々な樹種のツキ板をランダムに張ったエコミックスシリーズ、3×6、3×8、4×6、4×8判などの大判パネルに縦横に張ったラフカットシリーズ、ツキ板に国産材を使ったジャパニーズシリーズなど特徴的な製品をそろえている。


オールドジンダイ（上）とスライスアシバ

今回オークラスティックシリーズの新商品としてナラツキ板表面にダメージ加工を施したうえで古材調に仕上げたラフホワイトとリアルマックスオークを追加した。また、ジャパニーズシリーズでは同じくカラ松ツキ板の表面に中古足場板の風合いを再現したスライスアシバや神代杉を再現したオールドジンダイ（杉）を追加発売した。

これらはいずれも表面のビンテージ加工と塗装によって0・2ミリのツキ板とは思えない立体感ある質感を出している。同社はリアルパネル等の商品を広く提案するため、東京都内にショールームを開設する予定。

太陽光発電搭載最廉価モデル

ヤマダ・エスバイエルホーム

ヤマダ・エスバイエルホーム（大阪市、松田佳紀社長）は7月21日から、100棟限定で太陽光発電搭載の最廉価モデル「eスマイルファーストsolar」を発売した。36プラン（28～45坪）から選ぶ完全規格型商品で、太陽光発電システム5・11kWを搭載した45坪タイプで坪38万円から。さらに地域限定で同商品のサマーキャンペーンを開催。例えば、38坪タイプで太陽光発電システム4・845kWを搭載して本体価格1580万円で販売する。

eスマイルファーストsolarは2013年12月から販売した商品で、同社で最もコストパフォーマンスに優れ、性能面でも省令準耐火、次世代省エネⅣ地域仕様、耐震等級3、長期優良住宅対応となっている。構造は、1、2階を通しで強度を高めた長尺パネルの「SXL構法」（木質パネル一体構法）、基礎には軟弱地盤でも基礎剛性を高める「新・MS基礎」を標準採用。

なでしこの目

「美しさ」のある仕事を追求

大建工業デザイン部　内村恵美氏

大建工業（大阪市、億田正則社長）デザイン部の内村恵美さんは、商品企画に携わり10年のキャリアを数える。床材の色出し、ドアの意匠決めなどいわゆる「デザイン」にも携わるが、近年は生活者目線に立った商品企画が中心的な業務となっている。

住宅設備機器メーカーでの開発や、建築業者での経験を携えて大建工業に入社、東京都内ショールームでアドバイザー業務に5年間かかわった後にデザイン部に配属された。

同社デザイン部での業務は、様々な媒体から社会の変化を読み取り、ライフスタイルや住まい方までも含めた、将来的な製品の開発方針に関するアイデアを形にし、各事業部へ提案・落とし込みを行うこと。6月に発売された、細かな気配りによる使い勝手の良さが特徴の内部収納「リラクロ」にも内村さんのアイデアが詰まっている。

日常的に事業部へ新企画を提案するが、企画が通らないことも少なくない。「自分の企画した商品が世のなかに出ることがやりがい」（同）と、思い入れもひとしおだ。

TOTO、YKK APとの「TDY」アライアンスでのデザインワーキングにも携わっている。3社製品のコーディネート性を向上させるための打合せや作業など、会社の枠を超えて住環境全般を意識した取り組みが進み、その役割は重要だ。

同社入社以前から長年、インテリア関連を学んでいる内村さん。業界の先輩から得られることは多く、特に〝美しさ〟にこだわる姿勢は見習うことが多い。「資料一つにしても、丁寧で見やすさにも配慮した〝美しさ〟を追求している。何においても第一印象は大切なので、大切にしていきたい」（同）。

同社に入社してから整理収納アドバイザーの資格を取得した。営業部門から内村さんの知見を頼りにされて、全国のショールームなどで整理収納のイロハを教授するセミナーへ出向く機会も増えてきている。これまでは一般消費者を主な対象とするセミナーばかりだったが、7月からはプロユーザー向けのセミナー企画も展開していく。「プロユーザーにとって、収納関連の提案ができるようになれば、良い差別化のポイントになる。DAIKENのファンになってもらえればうれしい」（同）。

趣味は新スポットの探訪と食べ歩き。職業柄常に好奇心を絶やさず新しいものにアンテナを張り、それを追いかけるよう心掛けているそうだ。